

【調査報告】

産官学連携による観光ガイドブック制作事業とその評価  
——「やんばる観光ガイドブック」における地域貢献と教育的取組み——

Making a Tourist Guidebook in Collaboration with Industry,  
Government and Academia; and an Evaluation of the Project  
—— The Regional Contribution and the Educational Approach  
Indicated in the “YANBARU Tourist Guidebook” ——

大谷 健太郎, 比嘉 和志, 嘉手苺 健, 末吉 司, 石原 輝久,  
新垣 しおり, 喜舎場 千晶, 七夕 佳奈, 孫 迎迎

キーワード：沖縄県北部地域, 産官学連携観光事業, 観光ガイドブック, 観光教育, 地域貢献

1 はじめに

平成25年12月現在, 沖縄観光における入域観光客数の推移をみると, 平成20年度で約593万人に達したが, 平成21年度においては世界的な経済不況などの影響を受け入域観光客数は約569万人と減少に転じた。東日本大震災の影響で平成23年度の入域客数は約553万人まで落ち込んだが, 平成24年度には約592万人となった。そのうち, 平成24年度のビギナー率は18.2%, リピーター率は81.8%となった。沖縄観光はリピーター比率が高く, 近年では北部観光や離島観光が注目されており, リピーターを惹きつけるためには地元の生活に根付く「本物」の文化や開発レベルが低いありのままの自然を観光対象化して認知度を高める必要があると考えられる。沖縄県北部には認知度が高い顕在化された観光資源が多くあるが, 認知度が低い潜在的な観光資源も多くあり, 北部地域の観光では, 海洋博公園に所在する美ら海水族館や今帰仁城址からの観光客を各地に立ち寄りまたは滞在させることが重要な課題の一つと認識されている。

このように, 沖縄観光に関する従来からの指摘として, 沖縄観光における高リピート率, 北部地域における観光資源の通過性, 北部地域の認知度向上の必要性などをあげることができる。認知度を向上させて来訪を促進する方法としては, 直接的なプロモーション活動に加えてインターネットや口コミ, 雑誌, さらにパブリシティの活用などが一般的であろう。その観光事業の主体は民間と

なるが, 観光地としては公的組織によるビジョン設定や主導体制が重要となる。

そこで, 本調査研究は, 平成22年度から23年度にかけて制作された産官学連携による「沖縄県北部やんばる観光ガイドブック」事業を報告し, 平成24年度の効果検証をもとに「地元目線」の観光資源の魅力発信方法および沖縄県北部地域における観光振興のひとつの方法を考察する。

2 着地型観光の考え方

近年, 広く認知されている着地型観光の概念であるが, 本調査研究実施の根拠ともなるため, 尾家・金井 (2008), 山村 (2011), 海津 (2011) およびJTB総合研究所観光用語集などを引用しつつ簡潔な概念説明を行いたい。

旅行形態には複数の観光地を広範囲に移動することで宿泊地を変える周遊型観光と, その環境下でしか得られない余暇活動を求めて行なわれる目的型観光がある (JTB観光用語集)。初期の観光地の発展段階では「団体旅行」が主になるが, リピーター増加にともなって「個人旅行」へシフトする。この現象は, 観光産業の安定化につながる一方で, 何回も訪れることで周遊型から目的型に旅行形態が移行し, 土産品購入など現地での消費は減るという傾向も強くなっている。従来の周遊型観光ではリピーターは満足できないことが考えられ, リピーターのニーズ対策や今後の発展のための手段として, 新

たな観光資源の活用方策が求められている。地域はそのニーズに柔軟に対応し、地域による集客型ビジネスの「着地型観光」に力を入れていく必要がある。

以上のような考え方を踏まえた着地型観光とは、観光客や旅行者を受け入れる地域が主体となり自分たちの持つ『観光資源を生かして発掘、プログラム化し、旅行商品としてマーケットへ発信・集客を行う観光事業の一連の取り組み』であるといえる(尾家・金井(2008))。観光地を拠点とした集客型ビジネスのことであり、ビジネスを地域振興に結びつけていくという考え方が強い。着地型に対する発地型観光とは、都市部の旅行会社が実施する従来の送客型ビジネスであり、都市部の旅行会社が観光客を出発地から着地である観光地へ、企画から手配・販売・集客・実施という一連の生産・販売プロセスを経て実施される。観光地を拠点とした集客型ビジネスの着地型観光は旅行者を呼び込み、地元で消費してもらえという利点がある。

消費者の観光ニーズが成熟してくると、一般的には開発レベルが低いありのままの自然や文化を観光対象化する「本物志向」や、見るだけでなく何か体験してみたいという要求が高まる。しかし、発地の旅行会社が現地に行き体験ツアー商品を考えるのも限度があり、マーケットへ対応するために地域が主導して商品を作成していかなければならない。また、情報入手の容易化やインターネットによって直接的な情報発信が可能になったことから着地型観光は飛躍的に増加した。今まで観光地向けではないと思われていた地域が観光の目的地になるようになったことで、発地の旅行会社が取り上げなかった地域・知名度の低い潜在的な地域も観光対象となったのである。

海津(2011)でも強調されているが、潜在的な地域資源の発掘と観光資源化は市場対応が難しい分、着地型観光はより確実な商品化とPRをしなければならない。着地の臨場感の中で感動を呼び起こすことができれば、着地の良さについてリピーターがPRや口コミの宣伝を担い、さらに観光客を呼び込むことができる。このように着地型観光は、リピーター増加にあたって周遊型観光から目的型観光へと変化した旅行形態に、圏域内における周遊型かつ目的型観光を確立することができるのである。

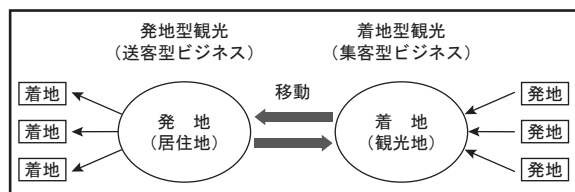


図1 ビジネスの観点からみた着地型観光の考え方  
出所：尾家・金井(2008)より引用作成

### 3 「やんばる観光ガイドブック」制作事業の概要

#### 3.1 事業の背景と目的

本島北部地域に属する12市町村は、古くから「やんばる」と呼ばれ、名護市を中心とする本島北部地域と伊平屋島・伊是名島・伊江島の離島からなり、山地・丘陵地が七割を占め、地形は急峻で変化に富み多くの水系が発達し、ヤンバルクイナなどの世界的に貴重な野生生物が多数棲息・生育している。海岸にはサンゴ礁が発達し、複雑な海岸線とあわせて豊かな自然と美しい景観を誇っている。また、西海岸地域は沖縄海岸国定公園に指定され、観光リゾートホテルなどの施設が立地集積しており、沖縄海洋博覧会記念公園にある「美ら海水族館」には年間約300万人の観光客が訪れている。

昨今の沖縄における観光客の移動手段の動向を見ると、約半数が滞在中にレンタカーを利用しており、その旅行ニーズは一層多様化してきている。こうした旅行者の行動範囲の拡大や旅行ニーズの多様化に応じて、広域的に連携した整合性のとれた広域観光行政・観光施策の展開が必要になっている。

そこで、国内外における観光地間競争が進む中、北部12市町村の連携により、観光資源を相互に結びつけ、個々の資源の魅力を相乗させ訴求力を高めていく必要がある。その方法のひとつが北部12市町村を網羅した「やんばる観光ガイドブック」の制作であり、平成12年度に発行されたガイドブックが10年を経過し、内容を発展的に更新しなければならない。圏域内における周遊型の観光を確立し地域全体を目的型の観光化に発展させることで圏域全体の経済波及効果を高め、地域活性化につなげることを目的としている。

#### 3.2 やんばる観光ガイドブック事業の内容

北部広域市町村圏事務組合による「やんばる観光ガイドブック事業」は、平成22年度から平成23年度の「ふるさと市町村圏基金事業」を活用して実施された。本節では、北部広域市町村圏事務組合による企画および事業概要書を引用し、時系列的な記述となるが、その内容を以下に整理したい。

##### 3.2.1 編集委員会の設置

平成22年度の事業では、北部12市町村の観光担当者及び学識者(名桜大学国際学群観光産業専攻)による編集委員会を設置する。旅行者ニーズの把握や各市町村における景観・文化・芸能・風土などの資源の再発掘、体験型観光メニュー・地域内周遊型の観光コースの考案、地域特産品の把握を行うことを目的とする。具体的な編集委員の構成は、北部12市町村の観光担当者12名、北部広

域市町村圏事務組合から2名、特別編集委員（名桜大学国際学群観光産業専攻）1名の計15名で、事業委託として制作担当となった地域振興を中心とするNPO法人の2名を加えた17名で編集会議が行われることになった。

### 3.2.2 編集委員会と制作過程

平成22年度は7月に第1回編集委員会を開催し、年度内においては計4回の開催となった。平成22年度に行われた編集会議での議論の要点を表1に整理する。

表1 平成22年度編集会議の内容

事業企画書における要点	編集会議での内容
1. 旅行者ニーズの分析と検討	既存資料の分析で代替する
2. 編集方針の決定	平成15年に発刊された観光ガイドブックの改訂を基本 既存ガイドブックとの差別化 主体である市町村の要望を重視
3. 市町村意向の吸い上げ	事務局と市町村の調整会議を設定
4. 地域資源の把握、調査	事務局と市町村の調整会議、制作担当による調査
5. 具体的な観光コースの設定	北部やんばるをひとつの地域として、周遊型観光コースの再検討
6. 周知方法	冬季に行われる大都市圏での観光キャンペーンに参加、配布
7. 発行部数	平成22年度は5,000部
8. 次年度以降への展開	平成23年度は改訂および増刷予定

はじめに、既存資料を分析し、沖縄観光の現状や観光客の動向、日本および大都市圏における観光旅行者のニーズなどに関する実態が報告された。また、前提として、国および県が取り組む観光政策の方針を整理し、市町村側からは各行政単位で策定された観光基本計画や観光政策をもとに取り組みされている観光施策についての方向性も確認された。

また、平成15年度に発刊された旧やんばる観光ガイドブックを改訂することも目的となっているので、既存ガイドブックとの差別化をはかりながら地域資源の抽出、テーマおよびコースの決定を行うこととなった。実際に掲載する地域資源や情報は、制作担当のNPO法人を中心として事務局と市町村担当者の調整会議を設定し、地域資源に関する市町村からの意向と要望を事前に確認することで編集会議に諮っていき流れとなった。

具体的な観光コースの設定については、宜野座村・金武町・恩納村を「やんばる南エリア」、名護市・本部町・今帰仁村を「半島エリア」、国頭村・大宜味村・東村を

「大やんばるエリア」、伊江村・伊是名村・伊平屋村を「離島エリア」とし、各地域資源を巡るドライブコースも同様のエリアごとに設定することとなった。編集委員会では、各市町村からの要望と制作担当の原案をもとに調整を進めていき、ガイドブックに必要な公的データや年間イベント一覧・アクセス情報なども盛り込む方針を決めた。

その後、冬季に行われる観光プロモーション活動に原案の完成を合わせるため、ガイドブック原案の入稿・校正を行い、平成23年3月に「平成22年度版やんばる観光ガイドブック」を発刊した。

### 3.3 公共主体による観光ガイドブックの特徴と産官学連携

観光に関するガイドブックを制作する主体は、民間と公共の二つに大別することができる。ガイドブックの制作主体が民間の場合、主に広告や事業者からの出資によって製作され、主体が公共の場合は、広告や特定事業者からの出資に依存しない性質を持つことが考えられる。この両主体にはそれぞれの特徴や強みがあるので、ガイドブックの制作目的によって主体を選定すれば良いのである。

公共ガイドブックは地域が主体となり、発信したい情報には地域からの要望と意向を強く反映することが可能であり、広告や事業者等の意向に左右されず、スポンサー収入に依存することなく観光資源の情報を発信・紹介することができる。一方、利用者側のニーズや動向などへの対応の課題がしばしば指摘され、地域からの一方的な情報発信に留まる可能性もある。すなわち、公共主体で制作されるガイドブックは地域の意向を反映しつつ利用者のニーズにも配慮しなければならない。その際に、地域の代表で公共主体の「官」、研究機関である地域の大学は「シンクタンク」的役割を果たす「学」、そして利用者の視点や産業的な理論を持つ「産」が連携することで、公共と民間という両主体の強みを発揮することが可能となる。

ただし、その公共と民間の連携の度合いには結びつきが緩やかなものから公共から民間への委託形式まで、ガイドブック制作の目的によって様々なレベルがある。代表的な事業には、国頭村・大宜味村・東村という沖縄県北部地域の三村と株式会社JTB沖縄が連携し、沖縄振興特別推進交付金事業（一括交付金）を活用した「やんばる地域情報発信事業」<sup>(1)</sup>がある。

本調査で扱う観光ガイドブックは公共主体であるので、民間の制作事業者と地域の大学がコンサルティングを行うことで産官学連携の観光ガイドブック制作事業に発展させることができる。たとえば、以下で説明する平成23年度「やんばる観光ガイドブック事業」では、地元



である名城大学生による観光資源紹介ページなどを記載し、あくまで「地元目線」に特化した形での観光地を紹介することが可能で、民間のガイドブックとは性質を異にしているといえるであろう。

### 3.4 産官学連携による観光ガイドブック制作事業の意義と地域貢献

平成23年度の「やんばる観光ガイドブック事業」は当初、前年度に完成したガイドブックの情報更新と増刷が主目的であり、そのための低額の予算が組まれていたが、産官学の連携をより高めて「学」にあたる名城大学観光産業専攻との関わりを強化し、情報更新に加えて学生が参加する企画が検討された。具体的には、平成23年度の事業に「地域の大学生という若者からの情報発信」というひとつの方針を加え、名城大学の国際学群観光産業専攻の学生が協力して事業を行うこととなった。その協力方法には様々なものが考えられるが、「地元目線」で「学生目線」という単純な方向性を設定し、学生自らが地域の観光資源を調査して評価することで資源の魅力をガイドブックにて紹介する方法を採用した。このため、低額な予算のまま実行も可能になり、教育的効果と地域をフィールドにした活動による貢献を期待できるものとなった。

「やんばる観光ガイドブック」は、北部12市町村を網羅した観光ガイドブックであり、圏域内における周遊型の観光を確立させ圏域全体の経済波及効果を高め、地域活性化につなげることを目的としている。この方針にしたがい、「地元である名城大学生による観光資源紹介」のページを盛り込むこととなった。平成23年度の基本方針は表2のようにまとめることができる。

表2 平成23年度事業の主な内容

事業企画書における要点	内 容
1. 情報やデータの更新	改訂・増刷にともない、情報やデータ、誤字などの修正を行う
2. 編集方針の決定	平成22年度に発刊された観光ガイドブックの増刷と改訂 着地型観光における「地域性」を大学生の目線で発信すること
3. 周知方法	新聞取材やパブリシティによって認知を高める
4. 発行部数	平成23年度は15,000部
5. 次年度以降への展開	平成24年度以降は増刷および多言語化、オンライン化などの案

3.3においても触れたが、本事業のガイドブックは民間の観光ガイドブックと性質を異にするため、地域住民である地元の大学生という観点から観光資源の魅力を伝

えることの意義と教育効果が期待されるものである。そこで、名城大学国際学群の観光産業専攻専門演習（大谷ゼミ）において観光振興に関するフィールドワークを実施し、資源の魅力と情報発信のあり方について調査を行った。ガイドブックに掲載する紹介文や構成を考えるため、学生が地元である北部地域の資源や観光施設などの調査を通して魅力要素を分析し、観光振興プロジェクトの実際を理解することを目的としたフィールドワークである。以下の表3に、平成23年度事業における学生の主な活動、表4に大谷研究室で簡易的に考案した主観的魅力評価の考え方を整理したい。写真1から6を用いて、その活動の様子やガイドブックの構成などを簡潔に紹介する。

平成23年度版やんばる観光ガイドブックを作成するにあたり、北部12市町村の「やんばる南エリア、半島エリア、大やんばるエリア、離島エリア」の四つのエリアから観光資源を抽出し、第一段階として学生から魅力的と感じる資源を選択してもらった。その後、実際の観光地にて実地調査を行い、あくまで主観的ではあるが、ゼミの学生それぞれが観光スポットを評価し、観光資源としての魅力度を測定した。その魅力度に関してゼミ内で議論し、写真と紹介文という構成で原稿を作成した。

表3 平成23年度事業における学生の活動

活 動	調査、活動の具体的内容
1. 予備的実地調査の実施	3・4ゼミ全体で本部町備瀬と今帰仁村今泊を調査
2. 調査地の分担	12市町村を網羅するため、離島を除く3つのエリアで実地調査
3. 1つの地域から1つの資源抽出	実地調査における魅力度を基に、1つの資源を抽出
4. 離島調査	平成24年1月に伊平屋・伊是名、その後は伊江島調査を実施 離島調査は2泊3日の日程、3年ゼミ全員で実施
5. エリアごとの原稿作成	写真の選択と紹介文を考案、デザイン原案も学生が担う
6. 原案校正と最終チェック	制作担当や印刷業者のチェックを受け、原案の完成
7. 新聞取材	ガイドブック発刊にともなう新聞取材を受ける
8. テレビ取材	その記事をもとに、「島人の宝」という番組から取材を受けて放映



表4 学生による観光資源の主観的評価モデル

評価のプロセス	主観的評価の仕組み
魅力度と整備レベルの評価ウェイト	ゼミ生38名の平均を採用 (魅力0.72, 整備0.28)
魅力度の構成	美しさ, 希少価値, やんばる度, お勧め度の4つ
魅力度の主観的評価	4つの基準で5段階評価 (素点×魅力ウェイト)
整備レベルの構成	アクセス性, 利便性, 安全性など8つの大項目に, 小項目24つのチェック数に整備ウェイトを乗じる
総合化	魅力点と整備点の合計を総合評価とする
議論による簡易評価	無数にある資源を全て点数化することが困難であったので, 最終的には議論を経て評価



写真3 学生による観光スポット紹介ページ



写真4 伊平屋村の協力による資源調査

Contents	Contents
●やんばるの海 ..... 2	●やんばるの海 ..... 2
●やんばるの大地 ..... 4	●やんばるの大地 ..... 4
●やんばるの暮らし ..... 6	●やんばるの暮らし ..... 6
●やんばるエリアマップ ..... 8	●やんばるエリアマップ ..... 8
●エリア特集	●エリア特集
●やんばるの歴史 ..... 10	●やんばるの歴史 ..... 10
●歴史の足跡 ..... 12	●歴史の足跡 ..... 12
●やんばるの自然 ..... 14	●やんばるの自然 ..... 14
●自然の恵み ..... 16	●自然の恵み ..... 16
●ドライブ特集	●ドライブ特集
●やんばるのドライブコース ..... 18	●やんばるのドライブコース ..... 18
●観光コース ..... 20	●観光コース ..... 20
●お楽しみコース ..... 22	●お楽しみコース ..... 22
●お楽しみコース ..... 24	●お楽しみコース ..... 24
●お楽しみコース ..... 26	●お楽しみコース ..... 26
●お楽しみコース ..... 28	●お楽しみコース ..... 28
●お楽しみコース ..... 30	●お楽しみコース ..... 30
●お楽しみコース ..... 32	●お楽しみコース ..... 32
●お楽しみコース ..... 34	●お楽しみコース ..... 34
●お楽しみコース ..... 36	●お楽しみコース ..... 36
●お楽しみコース ..... 38	●お楽しみコース ..... 38
●お楽しみコース ..... 40	●お楽しみコース ..... 40
●お楽しみコース ..... 42	●お楽しみコース ..... 42
●お楽しみコース ..... 44	●お楽しみコース ..... 44
●お楽しみコース ..... 46	●お楽しみコース ..... 46
●お楽しみコース ..... 48	●お楽しみコース ..... 48
●お楽しみコース ..... 50	●お楽しみコース ..... 50
●お楽しみコース ..... 52	●お楽しみコース ..... 52
●お楽しみコース ..... 54	●お楽しみコース ..... 54

写真1 構成の比較 (左側が平成23年度改訂版)

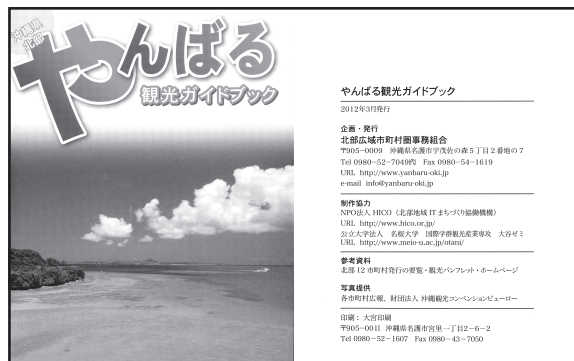


写真5 改訂版やんばる観光ガイドブックの表紙と奥付



写真2 新聞取材時の様子



写真6 調査を担当した学生

#### 4 アンケートによる簡易的な効果検証および課題抽出の試み

##### 4.1 利用者アンケート調査の概要

やんばる観光ガイドブックは平成24年3月に改訂および増刷され、年間1万5千部配布されている。主な配布先は、北部広域市町村圏事務組合、許田道の駅、北部9市町村観光担当課窓口、中部広域圏事務組合、県外では東京の地域活性化センターとなっている。本事業では、制作および配布は行ったが、平成22年度から実際の効果検証は行われてこなかった。そこで、改訂および増刷を終えた平成24年度末に、詳細なマーケティング分析や経済効果の把握などは実施できないが、本事業の課題を抽出して今後の発展可能性につなげるために効果検証のスタートアップとして学生主体の利用者アンケート調査を行った。その調査概要を表5にまとめる。

表5 改訂版やんばる観光ガイドブックの利用者アンケート概要

目的	ガイドブック利用者の評価と意見、改善点などを調査すること
実施主体	名城大学大谷研究室と北部広域市町村圏事務組合
調査期間	平成25年1月から2月
調査協力	OTSレンタカー臨空豊崎営業所とやんばる物産センター（道の駅許田）
調査対象	主にガイドブック利用者（県内外問わず）
調査方法	主にレンタカー利用者のモニター調査
訪問数	10の設問（シングルアンサー、サブクエスチョン5段階、自由記述）
回収数	モニター調査であったため70票に留まる

公共主体のガイドブックの効果検証は、期間や精度に前提はあるが、1社のレンタカー会社と道の駅許田の協力を仰ぎ、北部広域市町村圏事務組合と共同で利用者アンケートを実施した。ガイドブックの形態や配布場所・部数などを検討して改善し、北部地域の観光効果を高め、地域振興につなげることが目的である。調査形式は、観光客の出発時にやんばる観光ガイドブックを渡し、レンタカー返却の際にアンケート票を回収するという、実際の利用者を対象としたモニター調査形式となる。モニター調査にはOTSレンタカーに協力してもらい、観光客・レンタカー利用者を対象に平成25年1月28日から2月15日までの約3週間でアンケート調査を実施した。レンタカー受付時に配布し、旅程を追えたレンタカー返却時に回収する利用者モニター調査形式であったため、回収数は70票に留まることとなった。

調査計画当初、モニター調査と配付記入式アンケート

調査の配布数は2,000枚を予定していたが、年度内の実施を考慮して調査期間を短縮し、評価対象から道の駅許田の回収分は除外して報告することにしたい。参考として、実際のアンケート票を図2と写真7に示す。

##### やんばる観光ガイドブック 利用者アンケートのお願い

【ガイドブック概要とアンケート内容について】

2012年3月に北部広域市町村圏事務組合から「やんばる観光ガイドブック」が発刊されました。国内外における観光地間競争が進む中、北部12市町村の連携により観光資源を相互に結びつけ、個々の資源の魅力を相乗させ訴求力を高めていく必要があります。北部12市町村を網羅した公的な観光ガイドブックを制作し、周遊型の観光による圏域全体の効果を高め、地域振興につなげることを目的です。そのため、旅行者の皆様のご意見をお聞きたく、アンケート調査を実施することになりましたので、ご協力受け賜りますようお願い申し上げます。

【プロフィールに関して、該当箇所には○、または回答を記入して下さい】

■年齢（10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上）

■性別（男・女） ■お住まいの都道府県（ ）

【やんばる観光ガイドブック、北部地域、沖縄観光に関するご質問】

- 今回、沖縄を訪れた目的は何ですか？（観光・仕事・その他）
- 沖縄を訪れるのは何回目ですか？（ ）回
- 本ガイドブックを利用し北部地域を訪れましたか？（はい・いいえ）
- 今までに北部地域を訪れた回数は何回ですか？（ ）回
- 北部地域を訪れなかった方へのご質問です。他にも要因があると思いますが、ガイドブックを見た後で次回訪問する意思をお聞かせ下さい（ある・ない・わからない）
- 北部で最も印象的だった観光資源をお答え下さい（ ）
- 旅行中においてガイドブックの形態はどのようなものが望ましいですか？（ネット・冊子・両方・その他回答）
- ガイドブックについて<北部地域を訪れた方も、訪れなかった方もお答え下さい>

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	あてはまらない
1. ガイドブックは役に立ちましたか	5	4	3	2	1
2. デザインは良かったですか	5	4	3	2	1
3. 情報量は多かったですか	5	4	3	2	1
4. 地元度は感じられましたか	5	4	3	2	1
5. 学生が観光スポットを紹介するページは良かったですか(P.34~P.41)	5	4	3	2	1

- 沖縄にまた訪れたいですか？（はい・いいえ）
- 本ガイドブックで改善すべき点はありますか？（ ）

図2 調査で使用した簡易アンケート票の内容

##### 4.2 調査結果

ここでは、主にやんばる観光ガイドブックの評価と改善に関わる設問の結果を抜粋して考察することにする（図3から5）。回答者属性では30代と40代がもっとも多く、回収数のうち観光目的が85%、5%は沖縄県内の在住者であり、北部地域を訪れた経験では1~4回で約56%、ガイドブックを利用して実際に北部を訪れた割合が約70%であった。本調査研究にまとめるアンケート結果は、あくまでこのような属性に基づいての結果であることに留意されたい。

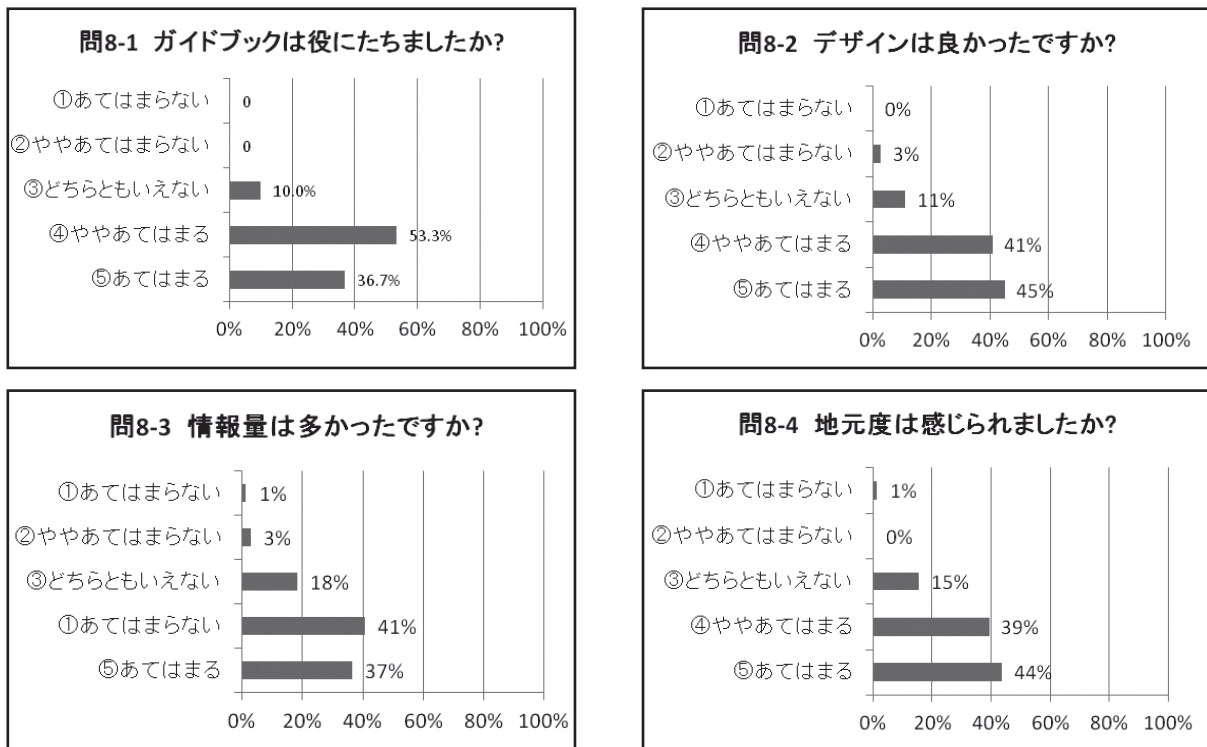


図3 利用者の評価

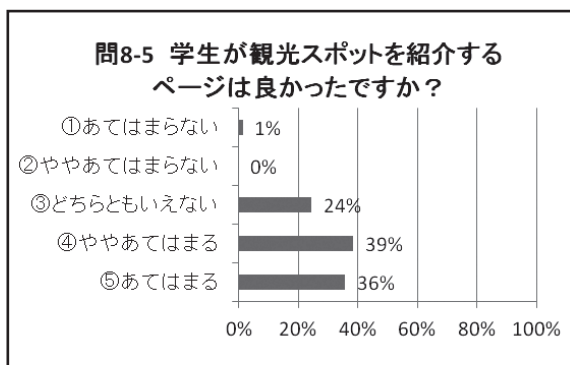


図4 学生ページの評価

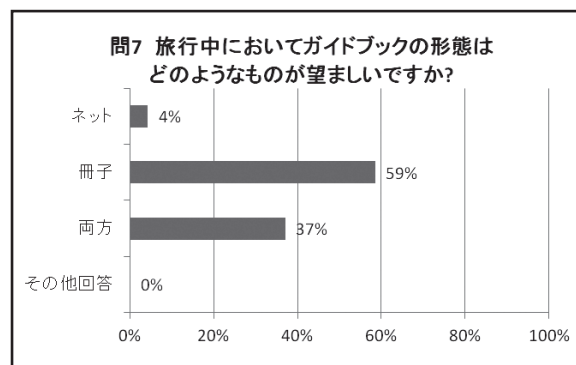


図5 情報の形態に関する希望

ガイドブックの利用に関する回答では、肯定的評価が70%から80%となり、おおむねの評価を得たと判断できるであろう。また、旅行中の情報やガイドブックの形態に関する回答では、冊子としてのガイドブックの需要も一定程度はあるという結果が得られた<sup>(2)</sup>。

#### 4.3 事業評価と改善点、今後の可能性について

今回の利用者アンケートから、予算使用の費用と事業効果を客観的に評価する費用便益分析は困難であるが、利用者の主観的評価と改善点を参考として総合的な評価を行うことは可能であろう。表6に示す評価と改善点に関する自由記述も参考として今後の課題を考察したい。

表6 自由記述における評価と課題

(評 価)	学生さんが紹介するコーナーは身近に感じられよかったです。
(評 価)	ガイドブックが読みやすく、わかりやすかったのでよかったです。
(評 価)	今回は「大やんばるエリア」のほうに時間がなくて行くことが出来なかったが、次回は絶対に行ってみようとおもいました。
(評 価)	初めて備瀬のフクギ並木を訪れました。沖縄は10回目でしたがもっと早く存在を知りたかった。
(評 価)	写真も綺麗で、まだ行ってないところがたくさんあると思いました。



(課題) 8年前から名護に訪れています。パワースポットも多いのでそこをもっと紹介してほしい。

(課題) 地元の人オススメの観光ルート・外食する店・お土産品等の情報がもっとあればよい。

(課題) 北部がどこなのか冊子を見てもわからない。

(その他) 恩納村から本部・今帰仁村は見どころ！立ち着く場所が多い。

(その他) 去年に続いて2回目の沖縄です。沖縄の美しさを大切にしたいですね。

(その他) ナビが古いようで走りづらかった。ナビを新しくしてほしい。

また、上記に加えて事業者からは「QRコードやレンタカー対応のマップコードも有効」という意見をいただき、英語表記や中国語表記などの多言語化も大きな改善点となろう。アンケートにおける冊子形態のガイドブックの一定需要を踏まえて、情報の分かりやすさと特徴、地域住民や学生などが関わり地元度を高めることができれば、今後も地域に特化した公共主体のガイドブックが、より効果的な媒体に発展する可能性があるといえるであろう。

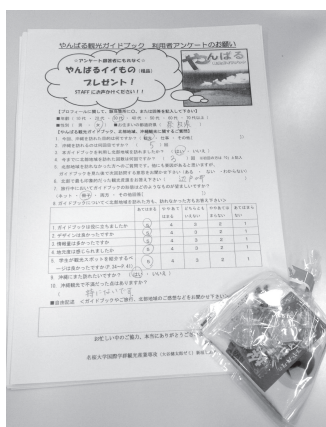


写真7 アンケート調査票と粗品（お茶とアメ）

## 5 おわりに ーまとめと今後の課題ー

本調査研究では、平成22年度から23年度にかけて実施された「やんばる観光ガイドブック制作事業」の実際と評価・今後の課題を中心として整理した。沖縄県北部地域において産官学が連携して観光事業を実施した事例は多くなく、今後はさらなる連携と発展が期待される。

今回の「やんばる観光ガイドブック制作事業」はあくまでパイロット事業的性質をもつことになるが、民間のガイドブックを取り入れた内容の多様化・さらなる情報の質の向上・より主体的に学生が関与する方法など、積

極的な課題が多く得られたと評価できる。

本調査報告は大学側からの視点でまとめられたものとなるが、今後は「官」と「産」からの視点と、連携による効果のさらなる検証と考察が必要になるだろう。たとえば、同時期に本事業の何十倍ともなる予算の沖縄振興推進交付金（一括交付金）を利用し、国頭・大宜味・東の三村と大手旅行会社が連携した観光ガイドブック事業との比較や、各地の観光事業における産官学連携プロジェクトの事例研究を通じた理論化など多くの研究的課題が考えられる。地域の事業は産官学の連携を行うことが本来の目的ではなく、よりよい効果を生むためのひとつの手段である。「官」では事業遂行の円滑化・産業との連携による地域経済的効果の増大・予算の圧縮化などが考えられ、「産」においても同様の効果と学生によるアイデアを取り込めることなどが期待できるであろう。一方、「学」における第一義は教育研究であり、効果としては地域における研究の促進、学生と地域の協働による教育的効果、地域貢献による効果創出で大学の存在価値を高めることであろう。

平成25年度現在、国土交通省が主導する北部広域市町村圏事務組合の「やんばる観光連携推進事業」が実施されている。名桜大学としても検討委員会や各テーマのワーキンググループで参加しており、地域の観光における産官学連携事業のさらなる発展が期待される。本調査報告で整理したように、やんばる観光ガイドブックとしても多言語化やポータルサイトにおける冊子のオンライン化、旅行前の段階での事前配布などの取り組むべき課題が明確になった。ガイドブックのみならず、地域の観光事業において、今後とも継続的に連携を強化していきたい。

## 謝辞

本調査研究は、北部広域市町村圏事務組合による「やんばる観光ガイドブック制作事業」に関わる活動を整理してまとめたものである。平成23年度の改訂版「やんばる観光ガイドブック」の奥付には、企画・発行で北部広域市町村圏事務組合、制作協力としてNPO法人HICO（北部地域ITまちづくり協働機構）と名桜大学国際学群観光産業専攻大谷ゼミと記載されている。ここで、ガイドブックの制作と編集、資源調査と各種調整を担当したNPO法人HICO、平成23年度改定時に携わり、卒業研究において本事業を取り上げ、アンケート集計を担当した名桜大学国際学群観光産業専攻大谷ゼミの学生、大学院の学生に感謝したい。

また、伊是名村ならびに伊平屋村の離島における実地調査では、受入れ時に両村の多大なる協力を得た。アン

ケート調査に関しては、OTSレンタカーとやんばる北部物産センターに協力を得て、調査を実施することができた。この場を拝借して、あらためて各関係機関に感謝を申し上げます。

## 付記

産官学連携による観光事業のため、観光ガイドブックの制作に多くの組織・団体・学生が関わるようになった。したがって、本調査研究の執筆者も多数となり、直接的に関わるようになった執筆者の氏名と所属を以下に示す。(平成25年12月現在)

大谷健太郎	名桜大学国際学群観光産業専攻
比嘉 和志	北部広域市町村圏事務組合
嘉手苺 健	名桜大学エクステンションセンター(元、北部広域市町村圏事務組合)
末吉 司	NPO法人HICO (北部地域ITまちづくり協働機構)
石原 輝久	NPO法人HICO (北部地域ITまちづくり協働機構)
新垣しおり	名桜大学国際学群観光産業専攻卒業生
喜舎場千晶	名桜大学国際学群観光産業専攻卒業生
七夕 佳奈	名桜大学国際学群観光産業専攻卒業生
孫 迎迎	名桜大学大学院国際文化研究科観光環境領域

## 脚注

- (1) 詳しくは、国頭村・大宜味村・東村 (2013) の「やんばる地域情報発信事業」の概要を参照されたい。詳細な分析や本調査との比較検討などについては別の機会に譲り、今後の研究課題としたい。
- (2) JTB広報室 (2011) のガイドブックに関するアンケートでは、情報の入手源は圧倒的にインターネットであるがガイドブックは冊子が好まれる傾向が示されている。しかし、高橋 (2012) でも示されているようにガイドブックの入手は出発前が多く、本事業においては配布に関する課題と捉えることができる。

## 参考文献

北部広域市町村圏事務組合 (2012) 『やんばる観光ガイドブック』。  
JTBパブリッシング (2013) 『るるぶ やんばる沖縄北部』, るるぶ情報版。

海津ゆりえ (2011) 「地域主導型観光—コミュニティがホスト役—」, 山下編『観光学キーワード』77, pp.164-165.

国頭村・大宜味村・東村 (2013) 『やんばる地域情報発信事業概要』。

尾家建生・金井萬造 (2008) 『これでわかる! 着地型観光—地域が主役のツーリズム—』, 学芸出版社。

沖縄県 (2012) 『沖縄県観光振興基本計画 (第5次)』。

沖縄県 (2013) 『平成24年度版 観光要覧』。

沖縄県 (2013) 『平成24年度沖縄県観光統計実態調査』。

高橋一夫 (2012) 『観光のマーケティング・マネジメント—ケースで学ぶ観光マーケティングの理論—』, JTB能力開発。

山村高淑 (2011) 「まちづくり手法としてのツーリズム—「交流」の意味を考える—」, 山下編『観光学キーワード』69, pp.148-149.

山下晋司編 (2011) 『観光学キーワード』, 有斐閣。

## 参考サイト (平成25年12月閲覧)

JTB広報室 (2011) 「旅先でのガイドブック利用に関するアンケート調査」『JTB Webアンケート調査結果』, Vol.64 <http://www.jtb.co.jp/myjtb/tabid/q/pdf/20111118.pdf>

JTB総合研究所 観光用語集 <http://www.tourism.jp/>  
沖縄県公式ホームページ <http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/14734.html>